

## みんなの童話

# 沢をとび越えた！

新しい年が明けた。でも平太には一つ悩みがあった。体育のとび箱がとべないことだった。

平太にはとび箱がまるでそり立つ山のように見える。くそっと思っ  
て走って行っても足がすくんでしま  
う。今年は六年生だ。でもまだ四段  
もとべない。体育をさせる学校がう  
らめしかった。

初夢で竜の背中にまたがって山を  
越えた夢を見た。ジジに話したら、  
「とび箱がとべんと悩んでいたで、  
そんな夢をみたのかも知れんな」  
と、竜神沼の話をしてくれた。

沼は町境の山にあった。平太も沼  
のあることは知っていたが、行った  
ことはなかった。

「沼には竜神さまが住んでて、悩み  
ごとや願いごとを書いたシャモジを  
浮かべておくと、かなえてもらえる  
と言われとる。でもでこぼこのけも  
の道だし不気味な沼だ。よほど度胸  
のある者でなければ行かんたるな」  
ジジはそう言って、平太の顔を見  
てなぜかにやっとならした。

次の朝、平太は家の者に知られな  
いように自転車を走らせた。こわ  
かったが竜神さまに願いをかなえて  
もらいたかった。でも庭でジジが見  
ていたことには気がつかなかった。  
自転車をふもとの竹やぶにかくす  
と山道を上った。けもの道だったが  
ジジの言うほどでもなかった。

でもクマザサの道は、先に行ける  
か不安だった。引き返そうかと思っ  
たが、シャモジは浮かべたかった。  
クマザサをかきわけながら上った。

流れのある沼に出た。とび越すに  
は少し無理だった。沼に倒れていた  
木を橋にして渡った。だいぶ上った。  
うす暗い杉林をぬけた。

沼だっ！目の前は沼だった。カタ  
カタツと、体がふるえた。竜神さま  
がいるんだ、そう思ったら動けな  
かった。

三方を雑木やつる草でおおわれ、  
黒くどろーんとよんだ沼だった。  
沼に來たんじやないのか、自分に言  
い聞かせたがだめだった。ふるえる  
目で沼を見つめた。



あつ、沼の中ほどに波紋ができた。  
こきざみにゆれ、輪をひろげて岸辺  
に近づいて来る。竜神さまだあ！恐  
怖がいちどにふき上がった。

うわあ！平太は來た道をころがる  
ように走った。振り向けば沼に引き  
ずり込まれる。がむしやらにけもの  
道を走った。

ふへーっ！とび上がってひっくり  
返った。ひっくり返ったまま起きら  
れなかった。竜神さまがー、あわて  
て振り向いた。でも竜神さまはいな  
かった。沢の音だけが聞こえた。

平太は立ち上ってびっくりした。  
とび越せなかった沢をとび越してい  
た。立ちすくんだまま、こもれ日に  
光る流れを見つめた。

口から火を吹き、きばをむき出し  
た竜神さまがおそいかかって来る、  
そう思って死にものぐるいで逃げた。  
沢のあることなど目に入らなかつた。  
でも竜神さまなど追いかけても來  
なかつた。おそろしかった、だから  
そう思ったのだ。

平太は意気地なしだった自分がな  
さけなかつた。「強くなれ」ジジは  
そう言いたかつたのだ。わらつたジ  
ジの心がわかつた気がした。

よしっ、強くなるぞ！平太はにぎ  
りしめていたシャモジを思いきり空  
にほかり投げた。

その気で夢中になればできるんだ、  
沼だつてとび越したんだ。もう弱虫  
じゃない、とび箱なんかこわくない。  
四段なんかへいちゃらだ！

平太はこぶしを天に突き上げると、  
一気にけもの道をかけ下りた。

阿久比童話作法講座・しるやま

講師 寺沢 正美